事業レポート

2016年12月17日

千葉商科大学経済研究所　公開シンポジウム

「地域資源活用による活性化～若者（大学生）・よそ者（プロデューサー）目線の活用で地方創生～」

中小企業診断士（千葉商科大学大学院中小企業診断士養成コース修了）

柴田　多敏

SHIBATA　Kazutoshi

プロフィール

社会保険労務士／第一種衛生管理者
柴田多敏経営労務管理事務所　代表
千葉商科大学経済研究所客員研究員（中小企業研究・支援機構担当）

■地域資源活用による活性化についてのシンポジウムが開催

全国で人口減少や過疎化にともなう地域の衰退が問題化しており、その解決への取組みは喫緊の課題である。今回のシンポジウム「地域資源活用による活性化～若者（大学生）・よそ者（プロデューサー）目線の活用で地方創生～」では、地域の活性化に取組む事業者（よそ者）、大学教授、その学生（若者）という、各々の立場からの報告がなされた。

具体的事例を交えた各位の報告は、今後の地域資源活用による活性化において考慮すべき、よそ者であるプロデューサー、および大学を含めた学生（若者）の役割、地域資源への関わり方ついて数多くの示唆を与えるものであり、パネルディスカッションにおいてもパネラー各々の視点からの活発な議論が展開され、関心の高さが伺われた。

詳細な内容は、千葉商科大学経済研究所発行の「中小企業支援研究」Vol. 4に掲載されているのでご覧いただき、ここでは当日の概要についてレポートさせていただくこととする。

■報告

（1）慶應義塾大学SFC研究所所長　総合政策学部教授　飯盛義徳氏からの報告

国や地方自治体の地域づくり委員等を多数歴任され、また、NPO鳳雛塾理事長を務める等により地域や人材の育成等に尽力されている、慶應義塾大学SFC研究所所長で総合政策学部教授の飯盛義徳氏からは、「地域づくりのマネジメント～つながりをつくり、創発を生む仕組みづくり～」と題した基調報告があった。

報告によれば、地域づくり活動で目指すべきは、次々と自発的な活動が生まれ盛り上がる状態になる「社会的創発＝イノベーション」である。その際には、ヒト・モノ・カネ・情報という地域資源が相まって進められるべきである。また、「資源にしていくという積極的な姿勢＝資源化」という考え方が重要で、地域資源を再認識して意味づけをする必要がある。そこでベースとなるものが、地域の方々とのつながりやコミュニケーションの基盤となる仕組みや空間であり、これをプラットフォームと呼ぶが、地域づくりとは、如何に効果的なプラットフォームを設計するかであり、①人と人との強い関係性と弱い関係性の共存、②上手な境界の設定、③資源の持ち寄りによる運営、というポイントを掲げられた。さらに、今後大学が果たす役割が重要で、大学と地域資源の結合が地方創生につながるものとし「できることから始めて、それを続けていく」ことの大事さを強調して纏められた。

（2）ランドブレイン株式会社　地方活性化グループチーム長　吉戸勝氏からの報告

「知恵と技術で社会に貢献する」を社是に掲げ、国の政策立案から現場の事業の実践まで、地域に必要な多様な分野の取組みを幅広く支援されている、ランドブレイン㈱地方活性化グループチーム長の吉戸勝氏からは、「地域活性化における外部人材の役割～全国の事例に学ぶ～」と題した事例報告があった。

報告によれば、地方創生に向けて活躍する外部人材として役割を果たす際、求められること、注意すべきこととして、①実践経験・高度な技術力・ネットワークをもって「私はこういうことができるから、ぜひやってみませんか」というものがあること、②地域に対する想いや愛着心から生まれた信頼感や強い使命感があること、③自己実現と地域の発展を同一視させ、それが双方にとって幸せであるとしてベクトルを合わせていくこと、④地域へ溶け込み、半歩先行き引っ張っていく行動をすること（大きな一歩では届かなくなる）、⑤主役は地域住民であり地域の主体性を尊重すること。また、謙虚さも大事であること、以上５点を掲げられた。今後の課題として、高齢化・人口減少という社会環境の中で地域づくりの推進役であるリーダー層の不在が顕著であるため、地域の中からリーダー層を輩出すること、つまり、人材育成が最も効果的な方策である旨を強調して纏められた。

（３）パネルディスカッション

パネルディスカッションに先立ち、「グリーンツーリズム」に取組まれる㈱ファーム・アンド・ファーム・カンパニー代表取締役の藤井大介氏、「みやじ豚」に取組まれる㈱みやじ豚代表取締役社長の宮治勇輔氏より、①如何に地域資源を地域の活性化につなげるかという視点で、また、本学で地域活性化の活動（久留里線プロジェクト）に取組まれる人間社会学部教授の鈴木先生とその学生たち、勝浦市と経済研究所との連携協定に基づいて行われていた「勝浦市総合活性化調査事業」に取組んできた３名の学生より、②大学が如何に地域の活性化に関われるのかという視点で、各位から個別事例の概要報告があった。

パネルディスカッションでは、①に対して、正確な計画策定、地域資源の徹底的な分析、つながりを構築すること、長期的（最低 10 年）な事業の継続により地域から信用を得ることの重要性が指摘された。また、初めて見た事業の全体像に対して「何らかの違和感」や「こうした方がいいのではないか」という感覚は大事にすべき旨も補足された。また、②に対して、地域の方々とのコミュニケーションや組織づくりが大きな課題であり、とくに地域の自治体や高校との連携の維持には腐心し、地域の方々と一緒にプロジェクトを完遂することが実はとても困難であることが指摘された。ただし、いろいろな形跡を残すことで、それを地域の方々が主体となって踏襲・実践し、そこに教員と学生が参加する、あるいは支援する体制が整えば、プロジェクトは存続する可能性が見込める旨も補足された。

■地域資源活用による活性化における“つながり”および「人」の重要性

報告者各位に共通しているのは“つながり”の重要性への言及である。地域と中小企業は似た特性を有しているが、それらの存続・発展には限られた資源を最大限有効活用することが求められ、有機的に“つながり”相乗的な効果を得なければならない。つながるための触媒が「人」なのであり、その人には様々な資源を統合し牽引する能力が必須であるが、このような特長を有した「人」に対する初期教育をする使命が大学にはある。今後、顕著な進捗を見せる高齢化・人口減少社会に向けて、（地域）社会を維持・活性させていくためにも、“つながり”や「人」に対する何らかの役割や関与を遂行する必要があることを改めて認識させられるシンポジウムとなり、大変有意義であった。

写真１　喫緊の課題である「地域資源活用による活性化」シンポジウムに多くの参加者が来場